

最終報告書レポート

タイトル：ミャンマーの少数民族、ナガ族の伝統音楽の調査と映像記録の作成

1：活動概要

今回の調査は、大きく二つの活動に分ける事ができる。

1) ナガ族に受け継がれる、木鼓（キャム）の制作を追った撮影。（3／2～3／16）

ゴーアンポニョ・ナガ族の暮すシャプロ村に滞在し制作を行う。制作費用は私が寄付をして、実際の制作作業は全て村人による手作業で行われた。また、森の中から村まで、およそ4kmの行程を100名前後の人力で運搬し、同村のパン（集会所のような建造物）内に木鼓を納めた。その後、完成を祝してお祭りを催す。

2) ラヘー周辺の村々で行った、歌唱／踊りの収録とインタビュー。（2／23～3／1）

ミャンマー側ナガ丘陵の中心地であるラヘーのゲストハウスを拠点とし、その周りに点在する訪問可能な村々を訪ねて回った。当初の計画では、ライノン・ナガ族の村を中心に訪問／滞在する予定であったが、道路事情が悪く、バイク移動が困難であると判断したため、ライノン・ナガ族以外の部族の村も調査対象とした。移動は全てオフロードバイク、ドライバー2名、ガイドと私の計4名で常に移動を共にした。（個々の活動詳細は別紙1、2を参照。）

2：受け入れ機関との協働

受け入れ機関であるライノン・ナガ族のコミッティーには木鼓（キャム）の制作を渡航前に依頼していた。しかし、現地で提示された制作予算が、支払える上限を超えていたため、ライノン・ナガ族の村ではキャムの制作を断念した。キャムの制作は断念したものの、コミッティーの代表者ウーモーニャイ協力の元に、ライノン・ナガ族の暮す村々での調査／撮影を行った。そして、現地で繋がったゴーアンポニョ・ナガ族のコミッティーの協力を得て、木鼓の制作を行うこととなる。雇っていたバイクドライバーが同部族のコミッティーのメンバーだったからだ。彼は、私の調査が停滞している様子を見てとって、みずから所属するコミッティーに働きかけてくれた。結果、当初の受け入れ機関であったライノン・ナガ族のコミッティー以外に、ゴーアンポニョ・ナガ族の協力も得る事になるのだが、この2部族間の関係は良好であるため、この変更が双方に及ぼす悪影響はないと考えている。

3：滞在期間中に感じた問題と課題

1) 調査時期について

私が調査をおこなった2～3月末にかけて、村人達は焼き畑作業で忙しい。雨季に入る前の土地が乾燥している時期に、山を焼き払ってしまわなければならないからだ。よって、村を訪ねてもお年寄りや子供を残して。男衆が不在であることが多く、歌や踊りを披露してくれる対象に出会う事がなかなかできなかった。村人のインタビューによって、12～1月が調査に適している時期とわかった。

2) ナガランド内の移動について

現地に到着して、拠点としていたラヘーから各村々への移動が、想像していたよりも困難である事がわかった。調査期間中の移動手段はオフロードバイクで、バイクと運転手をチャーターする。バイク2台に総勢4名と撮影機材を積んで移動となるが、村を訪ねるために場所によってはいくつも山を越えなければならない。また経路によっては、ぬかるんだ山道や道幅数十センチの細い道を通る事もある。危険と思われる箇所は、時間をかけて徒歩移動をする事で危険は回避できたが、そのような行程を進むのは非常に困難であった。よって、道路事情が悪い村への訪問は断念し、整備された道でたどり着ける村を訪ねることにした。当初予定していたライノン・ナガ族が暮らす村々への道のりは道路事情が悪く、訪問を断念せざるをえなかった。今回の滞在中で、11～2月の乾季に調査を行うべきである事がわかった。

3) 調査方法について

調査を開始してからの1週間は1日に数箇所の村を訪ねたり、場合によっては一晩宿泊して撮影やインタビューを行った。ナガ丘陵内ではラヘーを除いて電話は通じないことから、訪問を事前に知らせる事ができない、よって唐突な訪問になってしまう。唐突に訪問して歌や踊りの披露を依頼しても、承諾してもらえない事が多かった。承諾してもらえたとしても、元来から伝わる様式にのっとり披露してもらえた村は、2～3箇所である。開始からの1週間でこのような経験をした事で、一つの村に長く滞在し、村人とのコミュニケーションを密にとり、信頼関係を構築する事が重要だと考えるようになった。調査の後半ではシャプロ村に2週間滞在し、じっくり信頼関係を築く事ができたように思う。結果、キャンプの制作を通して、生活に密着した歌と踊りの撮影をする事ができた。

4：今後の予定と展望

今回の調査で収録した映像は、二つの内容に大別する事ができる。一つは、シャプロ村で行った「木鼓」の制作（A）。もう一方は、ラヘー周辺の村で行った、歌と踊りの撮影と各村の村長へのインタビュー映像である（B）。Aについては全行程を記録する事ができたので、制作行程を追った映像資料として、一つの作品作りを行う。しかし、現状では映像以外の情報が不十分であるため、今後現地の協力者と連携を取り、情報を集め、2016年末を完成目標として資料価値の高い映像作品の完成を目指す。また、2017年1月には、木鼓の制作を行ったシャプロ村を再び訪ね、完成した映像の上映会を行う予定である。そして、映像をDVD化して2017年1月のナガ族新年祭で販売、収益金をゴーアンポニョ・ナガ族、ライノン・ナガ族のコミッティーに寄付をする予定である。Bについては、情報が断片的で、「ライノン・ナガ族の歌と踊りを伝える映像」又は「ナガ族の文化を伝える映像」としても不十分だと考えている。今後調査を継続し、まずライノン・ナガ族の調査を改めて行いたい。そして、今回の資料と合わせて「ライノン・ナガ族の歌と踊り」を紹介する映像資料作りを行う予定である。

今回の帰り際に協力者ウーモーニャイと次回に向けたミーティングを行った、同氏から「ナガ族の人々にとって、もっと有益となるような調査活動を行って欲しい」との意見を頂いた。確かに、今回の調査は私個人の成果で、ナガ族の人々に潤いをもたらすものではない。彼からの意見でその事で自覚し、次回への課題を見出すことができた。個人の力で、ナガ族の人々が「潤った」と実感するような事業を行うのは困難だ。私以外の第三者を巻き込む事で、彼らに潤いを与える事が出来るかもしれないと考えている。次回の現地調査は2017年の12月から行う予定である、今後1年半の準備期間の中で、何をすべきか考えたい。

活動報告レポート 別紙1

タイトル：ナガ族に受け継がれる、木鼓「Khiam」(キヤム)の制作

ナガ族の暮らす各村には、「パン」という名前の建造物がある。パンは居住施設ではなく、村人が会議や催事のために集まる場所だ。そして、パンには2種類のパンが存在する。一つは村の各地区ごとに建てられるパン、もう一方は藩王のパンだ。藩王のパンは村の中でも特に重要な建造物とされ、村の代表を選出するときや村全体の重要事項を決める際に使われる。各地区のパンで議論・決定された事項を、地区の代表者が藩王のパンに持ち寄って、村全体の事柄を議論・決定がされる。また、パンの中には「キヤム」と呼ばれる巨大な木鼓が設置されている。小さいもので4、5メートル、大きいものになると14、5メートルはあるだろうか。その大きさに村の規模や力を推し量ることができる。そして木鼓についても、地区のパンに収めるものと藩王のパンに収めるものとは、形状・用途がことなる。特に藩王のパンに収まる木鼓は重要で、戦いで刈った相手の首をその周辺に木の棒に突き刺して設置していたそう(ナガ族はかつて、首刈りの習慣があった)。また生贄を祀るなど、村の儀礼で使われる。しかし現在、藩王のパンは作られなくなってしまったそう。

今回は、ゴーアンポニョ・ナガ族が暮らすシャプロ村で、地区のパンに収める木鼓の制作に挑戦した。

制作行程の紹介

1日目(3/2)

ゴーアンポニョ・ナガ族の代表者達と、木鼓制作に掛かる費用や日数について交渉。金額/日程共に折り合いが付き、制作が決定する。外国人の寄付を元にして、木鼓を制作する事が前代未聞である。同部族の村人達と、実際に制作を行うシャプロ村へ移動する。



写真01

写真01 ラヘーで行われた会議の様子。

2日目(3/3)

午前中、パンに村の男衆が集まり制作内容について会議を行う。制作する木鼓の大きさ、スケジュール、役割分担を協議した。ナガ族は頻繁に会議をする、それは村の中で誰か特定の個人が力を持つ事がなく、何かを決める際には話し合いによって決めるからだ。会議が終わり、村の祈祷師による占いが行われた。占いの結果でキヤムに使う木が生えている方角や位置が決まる。占いの結果を元に、村からおよそ3キロ離れた森

の中に分け入り、使用する木を探す。切り倒す木が決定、根元から見上げると先端が目視できないほどの巨木だ。シャプロ村の村長が木の根元に第一刀を入れる。後に続いて、およそ20～30人の村人が交代交代に斧やナタで木の根元を削っていく。およそ半日ほどで切り倒す事に成功。



写真02



写真03



写真04



写真05

写真02__祈祷師による占いの様子、パン内部にて。

写真03__村長に寄付をする筆者。

写真04__木鼓に使う木に斧を入れる様子。

写真05__参加した村人たち。

3日目 (3/4)

森の中での作業は休み。シャプロ村の鍛冶場で、丸太をくり抜くための工具を制作。村祭り用の伝統衣装の制作も行われた。村人の普段着は洋服だ。お祭りなど行事の時だけ伝統衣装を身に付ける。しかし村によっては火事で衣装が焼失、又は貧しさゆえに売ってしまうなどして、衣装を保有していない村も存在する。そのような村では、催事の際には別の村から衣装を借りてくるそうだ。このシャプロ村でも衣装を持っている人と、持っていない人がいた。また、衣装は彼らにとって大変貴重なものなので、火事で焼失しないように、個々の家には置かずに、まとめて火の気の無い倉庫に保管している。



写真06

写真06__鍛冶場の様子

4日目 (3/5)

木鼓は切り倒したその場で、木の内部をくり抜き、両端には装飾を施して完成型にする。丸太内部をくり抜く事で重量が軽くなり運搬が容易になるからだ。切り倒してから内部をくり抜き、外観を完成型に近づけるまででおよそ1週間かかる。この日はまず、木の両端を綺麗に切り落とす作業から始まった。そして、丸太をくり抜く作業をするための足場作り、近くを流れる川を利用して、水場/調理台作り、簡易休憩所の設置が行われた。これらはすべて森の中から調達できる資材のみで作られる。休憩所の設営では、木を切り倒して構造の骨組みを作り、木の皮をロープとして利用し骨組みを固定させていく。屋根は大きなヤシの葉っぱを何重にも重ね合わせるだけだ。水場の水道管はくり抜いた木材をうまく組み合わせて作り、川辺から運んできた石に木材を渡して調理台としていた。完全な自給自足である。そして、各作業はびっくりするほど役割分担がはっきり分かれていて、効率的に作業が行われていたのが印象的だった。夕方5時頃には、丸太の両端は綺麗に切断され、丸太の全長は12、3メートルとなった。とにかく巨大な木鼓になる事は間違いない。



写真07



写真08



写真09



写真10

写真07__作業場付近、森の中の様子。

写真08__足場作りの様子。

写真09__山の斜面、作業場に乘る巨木。

写真10__森の調理場と簡易宿泊施設

5日目 (3/6)

丸太の芯の部分をくり抜く作業開始。この行程で使われる工具は3/4に鍛冶場で作られた工具も含まれる。木鼓で使用する木は固くて重い木を選ぶ、それは良い音がして運搬時に割れてしまわないためだ。3種類の決まった種類の中から選ぶ(木の名前/種類については調査中)。切り倒した丸太は巨大なだけでなく、固くて重い。当然くり抜く作業も容易ではない。男衆20~40人、およそ半日で15~20センチほどの深さまで掘り進める事ができた。くり抜き作業の際は、印象的な掛け声を出しながら斧やナタを振り落としていた。旋律があるので歌のように聴こえるのだが、特に意味はないという事だった。調子を合わせるための掛け声である。歌の源流とはこのような事だろうかと思った。



写真11



写真12

写真11、12__くり抜き作業の様子。

6日目 (3/7)

木鼓の先頭部分に、インド野牛の装飾を掘る彫刻作業が始まる。隣の村でも同様な装飾を施した木鼓を見かけたが、さらに別の村ではトラを彫刻している木鼓も目にする事ができる。同じインド野牛でもその詳細は異なっていて、シャプロ村のバッファローはかなり精巧に作られた。



写真13



写真14

写真13、14__太鼓の先頭装飾部分、バッファローを彫る様子。

7、8日目 (3/8~3/9)

木づくり抜き作業、先頭インド野牛の彫刻作業。木鼓を鳴らす際は直径7~10センチ、長さ80センチ程度の木材を20~30人がそれぞれ手に持ち、木鼓を取り囲む。そして木材の先端を木鼓に叩きつけるようにして、音を出すのだ。くり抜き作業の過程では頻繁に木鼓を鳴らしていた。これは木鼓の響を確認するためだ。内部の空洞部分が広がれば広がるほど響きは良くなっていく。くり抜き作業と共に、徐々に音が変化していく様子が確認できた。さらに、木鼓を運搬するための「道」が森の中に新たに作られる。森の入り口から20分ほどの道のりだが、もともとは草木が生い茂っていて、道があるのか？無いのか？目視での判断が難しいほどの道のりである。村人たちは丸太を運搬するために、作業場から森の入り口までの全行程に、幅5、6メートルの道を切り開いていくことになる。



写真15

写真15__くり抜き作業の終盤の様子。

9日目 (3/10)

森の中での作業は休み。二班に分かれ、木鼓運搬用の縄(ロープ)として使う資材(トウ、竹)を森に調達、森の中で食べる牛を下ろし、調理をおこなう。

10日目 (3/11)

くり抜き作業、彫刻作業共に終了し、木鼓の外観がほぼ完成した。厚みがおよそ15センチになるまで丸太の芯は綺麗にくりぬかれ、内部には人間が10人以上入る事ができるスペースができていた。昨日調達したトウを材料として運搬用のロープを制作する。20メートルほど、二本のトウを火で炙り、表面が焦げて柔軟になったところをねじってロープを作る。次に運搬用の縄かけを木鼓に施す作業が行われる。木鼓の前後に牽引用のロープ、左右に持ち手が取り付けられた。運搬用の資材も全てを森の中で調達する。



写真16



写真17



写真18



写真19

写真16__木鼓内部に入った様子。

写真17__木鼓に牽引用の縄をかけた様子。

写真18、19__森でとった資材を利用して縄を作る様子。

11、12、13日目 (3/12～3/14)

木鼓の運搬作業を開始。作業場から森の出口まで1キロ、出口から村まで3キロの全行程、およそ4キロを人力のみで運搬する。機械の力やトラックなどは一切使用せずに人力のみで運搬するのがしきたりだ。村の規模が大きい様子を別の部族に知らしめるために、運搬の行程にはできるだけ多くの男衆が参加する。そのため同部族の村々からも、助人に男衆が集まるのが慣例だ。しかし今回、助人の人数が十分に集まらず、ほぼシャプロ村の村人だけでの牽引作業となった。それは制作の時期がちょうど焼畑作業の最盛期とぶつかっているためだ。通常、木鼓制作の全行程に女性は参加できないことになっているのだが、今回は人手不足だったため牽引作業のみ女性も参加する事になった。老若男女、総勢100名ほどの牽引部隊となった。木鼓を運搬する際は、100人の力が効率的働くように、村の長老格の人間が音頭をとり、村人が復唱して調子を合わせる。この掛け声にも独特の旋律があって歌のように聞こえる。掛け声の内容は「ゆっくり、ゆっくり」「力をあわせて!」という事ようだ。3/14の日没前に木鼓が村に到着する。



写真 2 0



写真 2 1



写真 2 2



写真 2 3

写真 2 0、2 1__太鼓を牽引する様子。

写真 2 2__村に到着した太鼓。

写真 2 3__先頭装飾部分の仕上げを行う男衆。

14、15日目 (3/15~3/16)

木鼓の完成を祝うお祭りを行う。通例では運搬終了後、1日休日を挟んでからお祭りを行うが、助人達が自分の村に帰ってしまう前に祭りを行う必要があるため、運搬終了の翌日に祭りが行われる事となった。お祭りは夜の11時頃に始まった、会場は木鼓が納まったパンの前の広場だ。村の男衆30名~40名ほどが、村の入り口から広場へ向かって入場してくるところから始る。この日のために新調した黒いTシャツと短パン、その上にナガ族特有の綺麗な装飾品を身にまとっている。中にはナガ族伝統のふんどしを身につけた古老もいた。以前はTシャツや短パンなどは着用せずに、ふんどしにナガ族の装飾品といういでたちで行っていたようだが、ミャンマー政府からの指導により着衣するようになったそうだ。広場の中央には、森から集めた薪に盛大な火が灯されて、その周りに手をつなぎ円になって男衆が取り囲む。お祭りの際も、木鼓牽引時と同様に、長老格の人間が音頭をとり、以外の人間が復唱するように歌う歌唱形式だ。ここでは、掛け声ではなく歌が歌われるのだが、歌詞の内容は即興的な要素が強い。その時の感情や思った事を旋律に乗せて独特な節回しで声に出す。歌詞の内容は非常に短く、シンプルで同じフレーズを何度も何度も繰り返す。10分以上同じフレーズを繰り返したかと思うと、次の歌詞に移っていく。今回の場合では「大きな木鼓が完成してうれしい」「日本人の寄進者に成功が訪れますように」といった内容であった。お祭りは夜通し、翌日のお昼頃まで休みなしで続けられた。参加した男衆の大半が12時間以上歌い、踊り続けたことになる。本来は休憩を挟んで夕方からお祭りが再開されるのだが、過密なスケジュールであったため、今回はここで終了となった。



写真 2 4



写真 2 5



写真 2 6



写真 2 7



写真 2 8



写真 2 9

写真 2 4～2 9__お祭りの様子。

今回の調査について

1つの村に2週間以上滞在し、木鼓の制作に密着することで、毎日同じ村人たちと行動を共にする事ができた。遠くから俯瞰するのではなく、なるべく近くで行動し、可能ならば木鼓の制作行程にも参加するように心がけた。結果、言葉は通じないのだが、信頼を得た実感がある。最初はよそよそしい態度だった村人も終盤にはほとんどの方々が、目が合うと何かしら声をかけてくれるようになった。とくにお祭りで歌を聴いた時にそう感じた。歌の節回しの深さ、声の力強さと説得力があり、「外国人に歌を歌わされている」ではなく、「嬉しいから声を出して歌う」という感情の変化を読み取る事ができた。表層をすくうような調査ではなく、本来の姿を知るために、長い時間行動を共にして信頼を得る事が重要だと感じた。



写真30

写真30__シャプロ村の村長



写真31

写真31__シャプロ村の古老

制作した木鼓について

今回の木鼓制作では、伝統的な制作過程とは異なる点がある。

- 1) 外国人からの寄付によって制作費が賄われた。
- 2) 通常よりも短い制作期間であった。
- 3) 制作の時期が焼畑とかぶっている。(本来は12月、1月などの暇な時期に行われる。)
- 4) 女性が参加している。
- 5) 同族の村々からの協力があまり得られていない。
- 6) 木鼓を収める、パンの制作が行われなかった。

などがあげられる。

元来は、厳格なルールがあり、1つでも不吉な要素が発生すると、制作は途中で中止になってしまう事もある。(例：切り倒した木の中をくりぬいてみたら、虫に食われていた。) 私たちが制作を行った、シャプロ村は仏教徒のみで構成される村であるため、ルールに対しても寛容であったようだ。しかし、いまでも土着的な信仰が中心になっている村々では、ルールが厳格に守られているという事だ。



写真32

写真32__完成した木鼓と筆者。

活動報告レポート 別紙2

タイトル：ナガ族の伝統的な歌と踊りの調査、撮影

ミャンマー側ナガ丘陵の中心地ラヘーを拠点とし、周辺の村々でナガ族の伝統的な歌と踊りの調査、撮影、有識者へのインタビューを行った。ナガ族と一言で言っても、その中でさらに細かい部族に分かれており、それぞれが異なる言語を使う。各部族間でも、使用言語が似ている場合はコミュニケーションが図れるが、かけ離れている場合などはナガ族同士でもまったく言葉が通じない事もある。今回はその中で、ライノン・ナガ族、ゴウアンポニョ・ナガ族、タンシャン・ナガ族、マチャン・ナガ族の村々を訪ねる事ができた。

ナガ族の歌と踊りについて

独唱という形式は無く、常に複数人で声をあわせた合唱の形式で歌を歌う。また、歌は常に踊りを伴う。西洋の合唱のように、全員が同じ方向を向き直立して歌う事はなく。参加者が手をつなぎ、輪になって回りながら声を出す。手をつなぐのは「武器を手放して、楽しみましょう」という意味があるそうだ。一人が音頭を取り、他全員が同じ内容を復唱する形式と、参加者が2グループに分かれて、交互に声を出す形式を見る事ができた。歌詞は即興的に歌われる場合と、定型に従って歌われる場合がある。また、シャプロ村の古老の話では、ナガ族は歌を使って、別の村と戦いをする事があったそうだ。節に乗せた言葉で相手を攻撃し、相手もそれに対して言葉で応戦してくる。言葉につまり応戦できなくなった方が負けという事だ。また、面と向かって相手に言えないような内容を、歌詞に含ませて、相手に伝える習慣もあったそうだ。（例：お客様さまに、私は肉を振る舞ったけれども、あなたは野菜しか振るまわなかった。）また、歌を日常的に歌うことはなく、歌と認識して声を出すのは、お祭りの際などに限られる。しかしナガ族の人々は、一様に労働や何か作業の際に歌と聴こえるような、かけ声を出す。例えば、脱穀作業している女性、複数人で力を合わせて物を運ぶ時男性などだ。村人に掛け声について聞いただけでも「歌ではない、ただの掛け声だ」と答えるのだが、掛け声の内容が何であれ、独特の節回しを伴うと、歌に聞こえてくる。歌唱の起源はこのようなところに有るのかもしれないと感じた。今回調査した範囲では、ビルマ族のような確立された音楽様式は見ることがなく、その場で即興的に作られる歌がほとんどであった。しかし、声の発声や節回し、踊りのスタイルなどは、部族を隔てても共通のものを感じ取る事ができた。また、昨年（2015年）の新年祭で観た他部族の中には、独特な楽器を使用する部族の存在も確認している、地域によって今回確認できなかったような、音楽のスタイルがあるのかもしれない。また、ナガ族の代表的な楽器としては、木鼓（キャム）の存在があげられるが、木鼓は楽器ではあるものの、ナガ族の生活や儀礼の中で使われる事が多い。

滞在した村の名前と部族

ライノン・ナガ族の村 __ミョーマ村、ノンチャンノンコン村、タイアン村
ゴウアンポニョ・ナガ族の村__シャプロ村、ソロー村
タンシャン・ナガ族の村 __サントン村
マチャン・ナガ族の村 __マチャン村、カレー村、ロンキー村

調査の行程

マチャン村とサントン村を訪問する。

マチャン村への道のりは整備されており、容易にたどり着く事ができた。まず村長宅を訪ねるが、不在。別の古老宅を訪ね、居合わせた老夫婦と数人の子供とコミュニケーションを図る。訪問の目的を伝えて歌を聴かせてくれるよう依頼すると、了承を得る事ができた。モンテニューという名の古老（男性）に家の外で披露していただいた。撮影後には、すぐに謝礼金の支払いを要求される。マチャン村からバイクを1時間さらに走らせてサントン村に到着、この村でも村長不在。見かけるのは老人と子供が大半であった。村の有識者の元へ案内してもらい、同じように取材の依頼をする。村の古老3名（男性）が歌い踊る様子を撮影した。祈祷師／キリスト教の牧師／エンジニアの3名だ。こちらが歌の内容についてリクエストを出す、「今歌うべき歌しか歌う事はできない。収穫の祝いや戦いの歌などは、その時々で歌うもので、今歌うと縁起が悪い」という理由から客人を歓迎する歌のみ撮影する事ができた。

マチャン村の情報

部族名__マチャン部族

ラヘーからの所要時間__30分（バイク）

サントン村の情報

部族名__タンシャン部族

ラヘーからの所要時間__1時間半（バイク）

生業__農業（米、トウモロコシ）

2 / 24

タイアン村、シャプロ村／ソロー村の村を訪問。

タイアン村を訪れ村長と会う事ができたが、撮影はできなかった。村人が畑に出払っているために、披露できる人間がいないからだ。タイアン村で昼食を済ませ、インドとの国境方面に向かう。1時間ほどバイクを走らせて、ゴーアンポニョ・ナガ族のシャプロ村に到着。村長と会う事はできたが、タイアンと同じく村人が出払っているために撮影はできない。翌日の再訪問と撮影の依頼をして同じ部族の隣村、ソロー村に移動。ソローは大きな村で軍の基地、教会、仏教のお寺もある（村の大半はキリスト教徒）。この日はお寺に宿泊することになった。到着後、ほどなくして軍のチェックを受ける。ナガランド内での滞在許可書の提示と行程や目的の説明をする。同日、村長の帰宅を待ってインタビューを行い、撮影の依頼をする。翌朝、村の中央広場に20名近くの女性が集まり、歌と踊りを披露してもらい、撮影を行う事ができた。

タイアン村の情報

部族名__ライノン部族

ラヘーからの所要時間__1時間半（バイク）

シャプロ村の情報

部族名__ゴーアンポニョ部族

ラヘーからの所要時間__2時間半（バイク）

生業__農業（米、トウモロコシ、野菜）

宗教__仏教

人口__300人以上

ソロー村の情報

部族名__ゴーアンポニョ部族

ラヘーからの所要時間__3時間半（バイク）

生業__農業（米、トウモロコシ、野菜）

宗教__キリスト教

人口__969人

2 / 25

午前中にソロー村を出発し、ラヘーへ戻る。途中、昨日訪ねたシャプロ村に立ち寄り、約束通り歌と踊りの撮影、村長へのインタビューを行う。シャプロ村はできてから6年と新しい村だ。もともと隣山の中腹に他の村と同じように山の斜面にへばりつくように位置していた。大きな火災を機に旧場所から仏教徒のみが現在の位置に移住し、新たに村を開いた。旧場所には主にキリスト教徒が残り、今も村を維持している。よって現在シャプロ村は新旧2箇所が存在する。元来ナガ族の村は山の中腹、又は頂上付近に森を開いて位置するが、新しいシャプロ村は、村と村を結ぶ幹線道路を挟むような形で開かれた場所に位置している。これは、新しい村を作る事に尽力した仏教のお坊さんが知恵を出し、生活の利便性を考えての事だそう。

2 / 27

ミョーマ村、ロンキー村を訪問

ミョーマ村は、ラヘーに隣接するように位置する村で、ラヘー中心部から徒歩20分とかからない。協力者ウーモーニャイの紹介により、村の広場で撮影／インタビューを行う事ができた。ミョーマ村での撮影後、ロンキー村へ移動するも、村長を含めた大多数の村人が不在であった。ロンキー村には政府から派遣された助産師が常駐しており、彼女の協力によって、畑から帰宅した村人を集めて歌／踊りの撮影を行う事ができた。同日はロンキー村のお寺に宿泊する。

ミョーマ村の情報

部族名__ライノン部族

ラヘーからの所要時間__20分（徒歩）

生業__農業（米）

宗教__仏教が大半を占める

人口__783人

ロンキー村の情報

部族名__マチャン部族

ラヘーからの所要時間__30分(バイク)

生業__農業(米、トウモロコシ)

宗教__仏教

人口__668人

2/28

カレー村を訪問。

村長は在宅であったが、村人の協力を得る事ができず、歌/踊りの撮影はできなかった。村長へのインタビューのみを行う。

カレー村の情報

部族名__マチャン部族

ラヘーからの所要時間__30分(バイク)

生業__農業(米)

宗教__キリスト教60%、仏教40%

人口__500名以上

2/29

ノンチャンノンコン村を訪問

同村とラヘーをつなぐ道は近年開通したばかりで、私が初めての日本人訪問客となった。交通が不便であるが故に、非常に貧しい村だ。訪問時は副村長を含めた村人の大多数は不在であったが、私の訪問を受けて、多くの村人が畑から戻ってきてくれた。10数名の男性陣によって歌/踊りを撮影させてもらい、村長へのインタビューも行った。

ノンチャンノンコン村の情報

部族名__ライノン部族

ラヘーからの所要時間__1時間

生業__農業

宗教__仏教



移動の準備をする様子



タイアン村



ソロー村



ソロー村で歌と踊りを披露した村人



シャプロ村で歌と踊りを披露した村人



ミョーマ村で歌と踊りを披露した村人



ロンキー村



ロンキー村の宿泊したお寺内観



カレー村



ノンチャンノンコン村



ノンチャンノンコン村、村長宅の内観



ノンチャンノンコン村、村長宅の内観